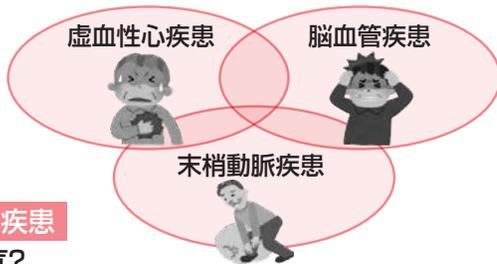


## 動脈硬化性疾患

津島市民病院  
循環器内科医長おおたか  
直也

「動脈硬化」が多くの危険な病気の原因になっていることをご存じでしょうか？

「動脈硬化」とは、血管の内側にプラークと呼ばれるコレステロールがたまり、動脈の内腔が狭くなる病態をいいます。わが国では、糖尿病や脂質異常症などの生活習慣病の増加をはじめ、高齢化の急速な進行の結果として「動脈硬化性疾患」が増加しています。動脈硬化は実は、0歳の時点から初期病変が形成されており、動脈硬化を促進する危険因子の存在や加齢により、急速に進行します。動脈硬化性疾患と呼ばれるものには主に、虚血性心疾患(心筋梗塞など)、末梢動脈疾患、脳血管疾患(脳梗塞など)があり、それぞれの疾患のみにとどまらず、重複して存在することが多いのです。



## 虚血性心疾患

## どんな病気？

日本人の死亡原因の第2位を占めるのが心臓疾患であり、その約半数は虚血性心疾患です。心臓の表面には「冠動脈」と呼ばれる血管が存在し、心臓の筋肉(心筋)はそこから酸素や栄養をもらい、ポンプの役割を果たしています。冠動脈が動脈硬化により狭まったり(狭窄)、閉じたり(閉塞)し、心筋が酸素不足になった状態の総称を「虚血性心疾患」と呼びます。虚血性心疾患のうち、狭窄した場合を「狭心症」、閉塞により心筋が死んでしまう病態を「心筋梗塞」といいます。

症状は、胸部圧迫感や身体を動かしている時の息切れ、喉の違和感、左肩や奥歯の痛みなどが現れることが多いですが、中には、無症状であることも多く、健診などで偶然発見されることも少なくありません。あまり知られていないのが、心筋梗塞を起こす冠動脈狭窄は、狭窄度の強くない場合が多いことです。つまり、狭窄度の強くない不安定な動脈硬化病変が突然はじけて、プラークが血管内に飛び出し、そこに血栓が集まり、血管を閉塞させて心筋梗塞を発症させるのです。しかし、狭窄度の強くない患者さんが発症前に来院したとしても、心電図や心臓超音波などの心臓の検査では異常として検出される可能性は低いです。そして、このような不安定な狭窄病変をもっている患者さんの多くは、未治療の高コレステロール血症や糖尿病などの危険

因子をお持ちのことが多いです。

心筋梗塞は通常、前兆がなく、ある日突然起こる死に至る怖い病気ですので、高コレステロール血症や糖尿病をお持ちの患者さんは、無症状のうちからしっかり内服治療を行い、動脈硬化性病変を安定化させ、発症を防ぐことが大切です。

## 検査/治療は？

虚血性心疾患の検査としては、採血、心電図、心臓超音波検査、心筋負荷シンチグラフィ、冠動脈造影CT検査、カテーテル造影検査があり、体にとって負担の少ない検査から行い、これらを組み合わせて診断にあたります。治療は、カテーテルによる冠動脈形成術と、開胸にて行う心臓バイパス手術がありますが、カテーテル機器の進歩のおかげで、ほとんどの症例でカテーテルによる治療が可能となっています。

## 末梢動脈疾患

## どんな病気？

末梢動脈疾患は下肢閉塞性動脈硬化症とほぼ同義であり、下肢の動脈硬化により、血管が狭窄または閉塞する病気です。症状としては、ある一定以上の距離の歩行により下肢のだるさや下肢痛、いわゆる「間欠性跛行」が出現します。危険因子としては虚血性心疾患と同じですが、中でも糖尿病と喫煙は、重症下肢虚血へ進展することが多いので注意が必要です。重症下肢虚血になると、下肢切断を余儀なくされるだけでなく、1年の死亡率は20%以上であり生命にも危険が及びます。

## 検査/治療は？

足関節と上腕の血圧比(ABI)を用いることが最も多く、手足の血圧測定を行うだけで末梢動脈疾患の有無がわかります。ABIに異常を認めた場合は、造影検査などさらなる精密検査を行います。間欠性跛行がある場合には、必要に応じてカテーテルによる血管内治療やバイパス術による血行再建を行います。

## おわりに

血管は一つながりであり、虚血性心疾患、末梢動脈疾患、脳血管疾患は1つの動脈硬化性疾患として考えることが大切であり、この3つの疾患のうち1つでもかかった場合は、その他の動脈硬化性疾患についても精密検査することが推奨されます。また、これらの病気は無症状のうちに進展することが多く、「サイレントキラー」とも呼ばれます。定期的な健診を受け早期発見に努めることが大切です。ご心配な方は病院でご相談ください。